新見公立大学紀要　第42巻2号
pp. 9－19, 2022

論稿

「総合的な学習の時間」における道徳性の育成

－東広島市立西条小学校におけるオペラ「白壁の街」と、小原國芳の『学校劇論』を中心に－

広瀬綾子[1)]*

1）新見公立大学健康科学部健康保育学科

（2021年12月1日受付、12月22日受理）

本稿は、道徳教育の指導法の一つである「演じること」や「役割演技」を問い直し、その課題を解決する手がかりとして、道徳性の育成を念頭に置いて行う「総合的な学習の時間」におけるオペラの創作と上演の活動、およびその妥当性ならびに理論的根拠となる、小原國芳による演劇教育と道徳教育の理論について明らかにするものである。総合的な学習の時間の一環として行われる東広島市立西条小学校におけるオペラ「白壁の街」の創作と上演の活動によって、多様かつ多面的な道徳的諸価値の育成や、家庭や地域社会との深い連携による道徳性の育成が可能になること、また、子どものうちで実感を伴って、道徳的諸価値を体得できること、などの道徳性が育まれることを明らかにした。また、その妥当性および理論的根拠となる、小原による演劇教育と道徳教育の理論について明らかにした。すなわち、①演劇は、頭、心、身体のすべてを用いて行う活動であり、子どもの全面的、調和的な成長や発達を促すこと、すなわち全人教育を可能にする、②子どものうちで実感を伴って、道徳性が醸成される、③演じることで子どもの道徳的感情が喚起されることなどを明らかにした。

（キーワード）総合的な学習の時間、道徳性の育成、オペラ「白壁の街」の創作と上演、小原國芳

はじめに

本稿は、道徳教育の指導法の一つである「演じること」や「役割演技」を問い直し、その課題を解決する手がかりとして、道徳性の育成を念頭に置いて行う「総合的な学習の時間」におけるオペラの創作と上演の活動、およびその妥当性ならびに理論的根拠となる、小原國芳による演劇教育と道徳教育の理論について明らかにするものである。

周知のように道徳教育では、特別教科化を契機に、多様で効果的な道徳教育の指導方法が強く求められ、その一つとして、「演じる」ことや「役割演技」が、子どもの道徳性の育成に大きな役割を果たすとされ、積極的に用いるよう推奨されている。たとえば、道徳の特別教科化に伴い使用されることになった文科省による検定教科書の冒頭は、「演じて考えよう」との見出しから始まる[1)]。また、「特別の教科　道徳」の学習指導要領では「児童に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫、動きや言葉を模倣して理解を深める動作化の工夫、音楽、所作、その場に応じた身のこなし、表情などで自分の考えを表現する工夫などがよく試みられる」[2)]との記述が見られる。期待される効果として「「道徳的諸価値」について「実感をもって理解」することができる」[3)]、役割演技を通して「自分自身の問題として深くかかわり、ねらいの根底にある道徳的諸価値についての共感的な理解を深め、主体的に道徳性を身に付けることに資する」[4)]とされている。

しかし、果たして週に1回、45分程度という細切れの「道徳の時間」で、そのようなことが可能なのだろうか。道徳的諸価値を実感を伴って真に理解するためには、「即興的に」行うのではなく、時間をかけて行う必要があるのではないだろうか。演劇のもつ本質が都合のいいように切り取られ、安易に道徳の授業に導入されてはいないだろうか。疑問は尽きない。文部科学省は、いじめ防止のための取り組みの一例として、「役割演技を通して、仲間はずれにする側の気持ち、される側の気持ちを考える授業」を提示したが[5)]、令和元年度の小中高生のいじめおよび暴力行為の件数は過去最多を更新し[6)]、頻発および増加の一途をたどっており、これらの取り組みの有効性は何ら明らかにされていない。また、学習の効果的な手法として「演じること」や「役割演技」および演劇的手法が安易に取り扱われ、本来の創造性豊かな表現教育としての意義が損なわれている[7)]、ならびに「その特性が理解されずに、十分効果的な活用が図られていない」[8)]との指摘や、指導する教員の力量が不十分である、との指摘も後を絶たない。こうした状況は、道徳特設時に初めて「劇化」として取り上げられて以来[9)]、「演じること」や「役割演技」を取り入れた道徳の授業が行き詰まりをみせていることを示している。

このような閉塞感は、どのようにしたら打破できるか。打破への道・手がかりはどうしたら得られるのか。この

*連絡先：広瀬綾子　新見公立大学健康科学部健康保育学科　718-8585　新見市西方1263-2

道・手がかりを見つけ出すにあたって大切なことは、わが国で「これはすぐれた実践」だと高く評価できる教育実践に注目し、これを深く学ぶことであろう。その注目すべき優れた実践の一つとして、広島県東広島市立西条小学校における、オペラ「白壁の街」の実践を取り上げることができる。この活動は、道徳性の育成を念頭に置いて行われるものであるが、「総合的な学習の時間」の一環としてクラス全員および学年全体で、半年以上の時間をかけて取り組むものであり、40年の歴史を持つきわめてまれな実践である。この学校の実践を取り上げるのは、それが40年間にわたって継続的に行われており、「総合的な学習の時間」や音楽教育の観点からもその意義が明らかにされ、適切さが実証されてきた実践であること[10]、そして、NHKや新聞でも取り上げられ[11]、全国小学校国語教育研究大会（1992年）や全国生涯学習フェスティバル（1999年）で上演されるなど、教育界において高い評価を受けてきたものであるからである。オペラ「白壁の街」は、歌や楽器演奏など音楽的側面のみならず、身体表現やダンスなど多彩な表現活動が取り入れられている。それゆえ、総合芸術である「演劇」と同等の舞台表現活動とみなしても遜色ないがゆえに、本稿では、必要や文脈に応じて、西条小学校における「オペラ」を「演劇」と表記する場合があることを断っておきたい。

この実践を大々的に展開してきた教師たちは、誇りをもって「オペラを長時間・長期間かけて創り上げることは、子どもの道徳性の育成にはかり知れないよい大きな影響を与えるものです」と言う[12]。だが、果たして教師たちの見解・主張は正当性・普遍性をもったものだろうか。独善的な見解なのではないか。このような疑問を投げかける人もいるかもしれない。

思うに、それが独善的な見方でない、他の多くの人々を納得させるものであることを示すためには、西条小学校以外で、演劇の道徳性の育成への寄与を主張し、教育学の領域で高く評価されている教育家・教育研究者の見解を示すことが必要である。「西条小学校の教師の主張と同様のことを他の偉大な教育家も言っている。やはり西条小学校のオペラ（演劇）による道徳性の育成についての見解は、普遍的な真理をもっている。私たちは西条小学校に学んで、閉塞感の打破の道を見出せるのではないか」。

その教育家とは、わが国を代表する教育者の一人である小原國芳である。小原は『道徳教育論』（1957年）ならびに『道徳教授革新論』（1957年）などにおいて、道徳教育について多くを述べ、また『学校劇論』（1923年）[13]においては、わが国で初めて演劇教育を体系的に明らかにした。『学校劇論』はわが国の児童演劇に対して理論的根拠を与え、日本の児童演劇・学校演劇に大きな影響を与えたとして高い評価を得ているものである[14]。周知のように小原は、わが国の学校教育に、「学校劇」のかたちで演劇を導入し、学芸会として定着させた[15]。そこでかれは、「学校劇と道徳教育は、実に偉大な関係がある」[16]と述べ、演劇を創り上げ、上演することそのものが道徳教育である、との見方を主張したのである。小原は、学習の補助手段として演劇を導入するのではなく、演劇創造の過程のなかで子どもの情操を豊かにし、自主性や協調性、道徳性を育むことを重視した。かれは、広島高等師範学校附属小学校をはじめ、成城小学校やかれが創設した玉川学園などで、みずから学校劇の実践を行い、その意義や成果、すなわち子どもたち全員が皆で演劇を創り上げ、上演することが子どもたちの道徳性を育むことを明らかにし、「演劇」そのものを学校教育および道徳教育に導入する意義と必要性を主張したのである。小原の教育思想については多くの先行研究があるが、小原による演劇教育について論究されたものは数少なく、学校劇の内容的な分析や、学校劇成立の歴史について述べられたものが大半である[17]。かれの演劇教育を道徳教育の観点から明らかにしたものは、「小原は、自ら舞台に立ち演じることが、いかに子どもの人格形成に役立つかを主張しており、実際に演じることを大切にしていたことが分かる」[18]といった見解が見られる他は、ほぼ見当たらない。

本稿は、上述の閉塞感を打破することを念頭に置きつつ、次の二つの点を解明することを意図するものである。その一は、東広島市立西条小学校におけるオペラ「白壁の街」を取りあげ、総合的な学習の時間の一環として行われるこの取り組みがいかなるものか、そして道徳性の育成にいかにして寄与するのかを明らかにしたい[19]。その二は、小原による、演劇と道徳教育に対する見方、すなわち、演劇の道徳性の育成への寄与についての見方を『学校劇論』に基づき、明らかにしたい。

1．東広島市立西条小学校におけるオペラ「白壁の街」

（1）オペラ「白壁の街」について

2002年、朝日新聞に掲載された「総合学習　演劇を導入し、人格育てよ」（2002年4月13日）との記事は大きな注目を集めた。演劇は「総合芸術」のみならず、コミュニケーション能力や他者と協働する力、主体性、創意工夫など子どもの人間形成や道徳性の育成に大きな役割を果たすことが指摘され、強調されたのである。「総合的な学習の時間」が導入されたことにより、演劇は、小原が「学校劇」を導入して定着させた学芸会や演劇クラブ、芸術鑑賞会などの限られた機会だけでなく、日常的に学校教育に入り込むこれまでにないチャンスと可能性を得た。脚本の選定やセリフの読み合わせなどの言語活動は国語、歌や楽器演奏は音楽、衣装は家庭科、大道具や舞台美術は図工といったように、演劇は「総合芸術」の側面を強く持つがゆえに、教科の枠を超えた総合学習の理念を実現するのにふさわしい活動である。それだけではない。近年では、演劇がいじめや不登校、引きこもりなどを解決する糸口になったり、

コミュニケーション能力や非認知能力の育成に大きな力を発揮するとして注目を集めている。

西条小学校がある広島県東広島市西条は、兵庫県の灘、京都府の伏見とともに、酒造りに適した気候や水の恵みから「日本三代銘醸地」と称される酒造りで栄えた地である。町には白壁と酒樽が並び、その歴史は約400年にわたる。全校児童数約1,000名が在籍する西条小学校では、このような歴史と伝統を背景に、毎年6年生全員約180名が、「総合的な学習の時間」の一環として、半年以上の時間をかけて、オペラ「白壁の街」に取り組む。オペラ「白壁の街」は、西条の伝統産業である酒造りを題材にし、酒造りの工程や酒蔵で働く蔵人の姿を、歌やリコーダーや鍵盤ハーモニカ、アコーディオンなどを用いた合奏、語り、和楽器（和太鼓・樽太鼓・締太鼓）の演奏、日本の踊りなどを盛り込み表現した、創作オペラである。この取り組みは1981年に始まり、「白壁の街」を引き継ごうという児童・教職員・保護者・地域住民の情熱や支援、協力によって支えられ、以後、40年にわたって途切れることなく毎年継続して行われてきた[20]。6年生児童を中心として教職員、保護者、地域の協力や支援によって支えられ、学びの集大成として、東広島芸術文化ホールくららで上演を行う。1,200人以上収容できる大ホールは毎年、満席である。

「白壁の街」の創作は、6年間にわたる、生活科（1・2年生）および総合的な学習の時間（3～6年生）の集大成として位置づけられている[21]。子どもたちは生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域や学校の歴史を体系的に学ぶ。たとえば4年生では、酒造りの決め手となる水、すなわち酒の仕込み水である龍王山から生み出されるやわらかな西条の銘水について学ぶ。5年生になると、市内に7つある醸造場や酒蔵、酒造会社を訪ね、蔵の中を見学し、酒造りの方法や秘訣について杜氏、蔵人から話を聞く。6年間をかけて、郷土文化の理解や、ふるさと西条への誇りと愛着を育むのであるが、こうした学びの集大成として、6年生では全員が「白壁の街」の創作・上演に取り組む。

オペラ「白壁の街」は、酒造りの仕事に打ち込む職人たちが、米を蒸し、麹をつくって仕込み、酒ができたら祭りで祝うという、約40分のオリジナルの舞台作品である。セリフではなく、全編が歌や楽器演奏など音楽で貫かれているがゆえに「オペラ」である。歌や楽器演奏を導く「指揮」も児童が担う。「オペラ」の名に恥じず、楽器の生演奏をバックに、子どもがソロで高らかに歌う場面も多い。CDは一切使用せず、楽器演奏や歌は、すべて生の演奏や歌で構成されているが、それだけでなく、ダンスや身体表現など多様な表現活動が取り入れられている。たとえば、歌やリコーダーやアコーディオンの楽器演奏も、直立不動で歌ったり演奏するのではなく、全身でリズムを刻んで表現する。「白壁の街」が始まった当初から、「学芸会」や「学習発表会」ではなく、「演劇」でも「ミュージカル」でもなく、「オペラ」であった。日本特有の伝統文化である「日本酒造り」を題材に、仕事歌や太鼓、楽器演奏など音楽で物語をつなぎ、西洋発祥の「オペラ」としたところに、この舞台を創作した当時（昭和56年）の西条小学校の教諭たち（松原博子[22]、腰元悦二[23]など）の気概と誇りがひしひしと感じられる。

校内に設置された、酒造りの歴史を生んだ西条の町並みについての掲示コーナー

「白壁の街」の特徴は、「オペラ」の名にふさわしく、セリフや場面の説明（いわゆるナレーション）がすべて、歌のかたちで表現されていることにある。劇中には、何曲ものオリジナルの楽曲があるが、これらの多くは酒造りの情景や蔵人たちの心情を繊細にイメージ豊かに描いた「仕事歌」や「祝い歌」である。仕事歌は、豆絞りをつけた蔵人役の子どもたちが、蒸米の包み（白い袋）をかついで運びながら歌い踊るのであるが、韻律に富みリズミカルで躍動感があり、心地よい響きである。「冬場の寒さは骨身に凍みる　それを凌ぐが蔵人気質　さあ よいしょ よいしょ」「夜明けの麹は 眠りを知らぬ、指で脈みる 杜氏の仕事」。しかし、歌詞を見るとわかるように、子どもにとっては難しい内容や表現も少なくない。そこで、「白壁の街」のメ

酒造りの場面を練習する児童たち

イン指導を担う音楽専科の富樫真紀教諭が「その歌詞には、どんな思いが込められているだろう？」と児童に問いかける。単に音程やリズムを正確に刻んで歌うことができればよいわけではない。職人たちの苦労や願いを感じながら、思いをはせながら歌うことができなければならない。それは簡単なことではないが、教科書を読んだり、話を聞いただけでは実感しがたい職人たちの喜びや悲しみ、良い酒を造るための蔵人たちの工夫や努力、蔵人たちが歌うことで労苦を和らげたり団結を強めたりすることを、子どもたちは全身を使って歌い、踊り、演じることで、深く実感することができる。

（2）練習、準備、上演について

オペラ「白壁の街」には、6年生全員が取り組み出演する。クラス単位ではなく、また「希望者」や「有志」でもなく、全員が参加することは特筆に値する。約180名の子どもは全員が、杜氏（2名）や蔵人（34名）、むろ（12名）といった酒作りの職人役をはじめ、楽器演奏（アコーディオン、シンセサイザー、木琴など）、踊り（リコーダーや鍵盤ハーモニカを兼ねる）、太鼓などの役割を担う。5月には、配役や役割を決めるオーディションが行われる。ソロで歌ったり、人前で身体を使って表現することが得意な子どももいれば、仲間たちとともに皆で楽器を演奏することを望む子どももいる。特別の教科「道徳」学習指導要領には、「みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努める」[24]とあるが、「自分の役割」は、強制や教師によって割り振られるのではなく、自分の意志で「やりたい役割を選ぶ」ことがこの時期の子どもたちにとってはとりわけ重要である。6年生ともなると、自分に適した役割は何か、自分は全体にどのように貢献できるのか、自らの意志で自覚的に取り組むことができるようになるからである。それゆえ、「強制」ではなく自分の意志で選んだものについては、子どもたちは、最後まで自覚と責任をもってやり遂げる。もちろん、オーディション次第では、必ずしも希望の役割につけるとは限らない。希望の役割につけなかった子どもは、教師の手厚いサポートにより、新たな役割で自分の力を発揮しようと前に進む。ダンスや身体表現は体育が専門の教師が指導を担うなど、教師も一丸となって、サポートを行う。「白壁の街」は、誰もが主役になれるような構成となっていて、子どもたちの個性を活かせる場所が必ずある。それゆえ、6年生の児童数は180名を超えるにもかかわらず、大人数の中に埋もれてしまったり、他人任せの子どもがおらず、一人一人が輝いている。

夏休みを前にした2021年7月中旬、初めての全体通し稽古が体育館で行われた[25]。そこでは、子どもたち一人一人を大切にする姿勢が、子どもたちに向き合う教師たちにみてとれた。富樫教諭は、全校児童を前に次のように言った。

合奏や動きの練習に励む児童たち

「今日は、ここにいるみなさん全員で通し稽古ができる最初で最後の日です」。180名の子どもたちは静まり返る。本番まで二ヶ月以上あるのに「最後の日」とはどういうことなのか。富樫教諭は続けた。「一学期をもって、転校する仲間が二人います。なので、今日は全員で通し稽古ができる最初で最後の日なのです」。通し稽古の最後には、転校する二人の児童が皆の前でそれぞれあいさつをした。「今日はみんなで通し稽古ができてよかったです。僕は本番に出ることはできませんが、みんながんばってください。僕も新しい小学校でがんばります」。180名という大人数の中でも、この児童二人は、かけがえのない存在として教師や仲間たちに見守られ、見送られた。富樫教諭の働きかけには、子どもたちのうちに、共に過ごした仲間を思いやり、大切に思う気持ち、すなわち子どもたちの道徳性を育みたいという明確な意図が込められていたのである。

2学期が始まると、上演まで一ヶ月となり、一人ずつに法被が配られる。法被は、地元の酒造協会より寄贈され、歴代の先輩児童によって代々受け継がれてきたものである。法被やはちまきなどの衣装を身につけ、練習にも一段と熱が入る。オペラ「白壁の街」は「第〇〇代」という冠が付く。本年度は開始から41年目を迎えたので、「第41代」の活動である。ストーリーや登場人物、歌や踊りなどは、基本的には代々受け継がれてきたものを踏襲するため、内容や演出が大きく変わることはない。先代や先々代の歌や踊りをコピーし、形にすることまでは比較的短期間でできる。しかしそこから先に大きなハードルが待っている。「白壁の街」の特徴の一つは、各代が「先代超え」を目指すことであり、その代ならではの「白壁の街」を創り上げることが伝統であり目標となっている。富樫教諭はこのことを「毎年、グレードアップしていかなければならないから大変」と漏らした。これに向けて、通し稽古の終了後には、子どもたちが各パートごとに集まり、パートリーダーを中心に反省や課題、改善点を一人一人が出し合い、議論する姿は、目を見張るものがあった。「「自分で課題を見付け、自

ら進んで挑戦し、工夫し、追求し、徹底し、仲間と協働して新たな価値を創造する」これが西条小学校の伝統です」[26]と西条小学校の校長である中嶋崇弘は述べるが、子どもたち自らが改善点をみつけ、課題を設定し、それに挑戦する姿は、まさに総合的な学習の時間の本質である[27]。

2021年はコロナ禍の影響により、上演10日前まで緊急事態宣言が発令されていた。そのため、 学校は午前中3時間だけの短縮授業となり、練習できる時間も限られていた。「もう不安しかない」と先生たちが嘆く中、子どもたちは不思議なくらい明るかったという。「パートごとの練習では今まで以上に細かい部分を指摘し合っていましたが、そこにはいつも笑顔がありました。みんなで高めていくことに喜びを感じているようでした。今の自分に満足せず、より高みを目指して徹底して取り組む子どもたちの全力の姿が見えました」[28]と中嶋は語る。子どもたちは、現状に甘んずることなく、よりよい表現をめざして、教師に言われずとも自ら目標を立てはじめる。その目標の実現を目指して、粘り強く練習や努力を重ねる強い意志や実行力が育まれる。自己を高めようとする意欲や態度[29]の出現である。その背後にあるのは、子どもたちが本来もっている「自分自身を人間としてより高めたいという思いや願い」[30]である。練習の際には、困難や失敗に直面しても、投げ出さずあきらめず、自らを奮い立たせようとする子どもの姿が随所にみてとれた。自分の弱さを乗り越え、よりよく生きていこうとする強さや気高さが自己の内に備わっていることに気付き、これを存分に活動させることで、子どもたちは夢や希望を見出すことができる。小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」では、22項目ある内容項目（育成が推奨される道徳性の項目）のなかに、「希望と勇気、努力と強い意志」とあり、ここには、「より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと」[31]との記述が見られる。また「よりよく生きる喜び」とあり、「よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じること」[32]と記されている。どのような状況に置かれても目標を見失うことなく、困難を乗り越え、希望と勇気をもち、より高みを目指して仲間とともに切磋琢磨する子どもたちの姿は、まさにこれらの項目を達成するものである。

いよいよ上演の日である[33]。東広島市では、毎年10月の第2土・日曜日の2日間に、中央公園と西条酒蔵通りを中心にして「酒まつり」が行われるが、上演はこの日に、東広島市芸術文化ホールくららで行われる。4階席まであり、1200席を誇る市内随一の大きなホールである。舞台装置は地元の酒造協会から寄贈されたもので、舞台セットの搬入・搬出や設置は、PTAの保護者が中心となって担う。教師、保護者、地域の三者が一体となった取り組みである。広いステージ、華やかな照明、そして、客席は、保護者や卒業生、地域住民、地元の新聞社・テレビ局などの報道関係者で満員である。本番を前に中嶋は、「悔いを残さないように、みんなの力を出し切って！」と子どもたちを激励した。子どもたちには、緊張感とともに、気合と覚悟がみなぎっている。オープニングは、校歌の演奏・合唱から始まり、「第一場　蔵入りの場」「第二場　蒸し米造りの場」「第三場 麹室の場」「第四場　仕込みの場」「第五場　新酒祝い の場」「第六場　祭りの場」と続く。息の合ったのびやかな歌や合奏、迫力ある太鼓の演奏、躍動感あふれる生き生きとした身体表現と踊り・・・。子どもたちは、練習の成果を如何なく発揮した。最後は、祭りの太鼓とともに、「西条踊り」そしてよりエネルギッシュな「西条樽踊り」で締めくくられる。子どもたちが全身を使ってダイナミックに踊る姿は圧巻である。客席は熱気に包まれ、祭りの一体感で満ちあふれる。割れんばかりの拍手で幕を下ろしたあとも、舞台と客席にはいつまでも余韻が漂っていた。

西条樽踊りを踊る児童たち（上演）

2．「総合的な学習の時間」の一環としての「白壁の街」による道徳性の育成への寄与

「総合的な学習の時間」の一環として行われる「白壁の街」の創作と上演の取り組みは、子どもの道徳性の育成にどのような役割を果たしているのだろうか。以下、四つの観点から述べたい。

一つ目は、総合的な学習の時間の中でこのような取り組みを行うことによって、すでに述べてきたように、「郷土の伝統や文化の尊重、郷土を愛する態度」「向上心、個性の伸長」「集団生活の充実」「希望と勇気」など、多様かつ多面的な道徳的諸価値を育むことが可能となり、子どもの道徳性をより深く豊かに発展的、調和的に育むことができることである[34]。オペラ「白壁の街」の練習の際には、子どもたちは、あいさつや規律についても学んでいた。練習を始めるときには、全員で元気よくあいさつをすること。練習に遅れることのないよう時間を守ること。法被をきちんとたたみ、楽器とともに整理整頓して舞台袖に置いてお

くこと。このように礼儀や規律も養われる。周知のように、道徳教育は、「学校の教育活動全体」を通じて行うことが強く求められている。また、道徳教育は学校の教育活動全体のなかでもとりわけ総合的な学習の時間と連携することが求められているが[35]、それは、総合的な学習の時間の特質でもある横断的・総合的に学習に取り組むことで[36]、すでに述べたように、主体的に学びを進めたり、他者と協力して何かを成し遂げたり、自らの目標を設定しこれを実現して自己の生き方を考えるといった力を育むことができるからである。オペラ「白壁の街」の創作と上演の取り組みは、このような力の育成を可能にするものであるが、このような力の育成は、道徳性の育成そのものといっても過言ではない。

二つ目は、総合的な学習の時間の中で行うオペラ「白壁の街」の創作と上演が、家庭や地域社会との深い連携による道徳性の育成[37]を可能にすることである。「白壁の街」の創作・上演では、家庭や地域の人々の協力が欠かせない。「白壁の街」を創り上げていくにあたっては、酒造りに携わる職人や地元で活躍する太鼓や踊りの専門家たちが「白壁名人」として、西条小学校にやってくる。一人目は、東広島市内に七つある醸造場の一つ、亀齢酒造株式会社の第6代目社長であり、西条酒造協会の理事長でもある石井英太郎である。石井は2021年7月に来校し、「酒造りのプロ」として、子どもたちを前に、杜氏や蔵人の動きや表現の指導を行い、「自分たちが今している動きは酒造りの何を表現しているのかを考えて」と問いかけた[38]。二人目は、すでに述べた松原博子である。松原は、「初代白壁指導」として、毎年、西条小学校を訪れ、子どもたちに「歌っている歌詞の意味を考えながら表現してほしい」とアドバイスを行い[39]、演奏や歌唱指導を行っている。三人目は、太鼓指導の西谷勝彦である。西谷は、和太鼓・樽太鼓・締太鼓のそれぞれの特色を子どもたちに教えた上で、「しっかり腰を落として、力みすぎないように」と太鼓の演奏の指導を行った[40]。四人目は、杜氏の石川達也（広島杜氏組合長、日本酒造杜氏組合連合会副会長）である。石川は2021年10月に来校し[41]、子どもたちに日本酒造りの精神すなわち「和醸良酒」（和が良い酒を作る）をわかりやすく伝え、職人たちが一体となって力を合わせて酒造りをすることの大切さを説くと同時に、日本酒造りと舞台創りは同じだと強調した。すなわち、一人一人が自分の役割に責任をもち全うすること、自分さえよければいい、という考えが日本酒造りや舞台創作をダメにすること、誰一人欠けてもうまくいかない、失敗してもみんなでお互いをフォローすること、思いを一つにすることの大切さなどである。それらはすべて、子どもたちが日々取り組んでいる練習に通じるものであった。子どもたちは、自分たちの日々の言動や練習を省みて、二週間後に迫った上演を前に、石川の言葉に深くうなずき、熱心にノートを取っていたのである。このように、伝統文化の継承者として活躍する専門家による指導は、子どもたちの目を輝かせ、伝統文化やそれを担う人間に対する敬意と誇り、そしてこれを受け継いでいこうとする意志をより一層、子どものうちに育むのである。

オペラ「白壁の街」の創作と上演にあたっては、上述のような地域との連携だけでなく、家庭との連携を重視している点も特筆に値する。保護者の中には、西条小学校の卒業生もおり、親子二代にわたってオペラ「白壁の街」に取り組む家庭もあり、子どもは当時の様子を保護者に聞いたり、助言をもらうこともある。こうした中で、子どもは、家族の支え合いや助け合いの大切さを実感するが、このことは「家族愛」や「家族への敬愛」[42]の念を育むことにもつながっていく。上演前日には、PTAの保護者が、大道具やキーボード、大太鼓などの楽器を小学校から芸術文化ホールへと搬入し、建て込みやセッティングを行う。また、上演終了後には、手際よく大道具を搬出し、子どもたちの健闘をたたえ、円陣を組んで互いの労をねぎらった。子どもたちはこのように、家族や保護者の支えや協力なくしては、「白壁の街」の創作と上演は成り立たないことを身をもって実感するのである。

三つ目は、子どものうちで実感を伴って、道徳的諸価値を体得できること、すなわち道徳性が醸成されていくことである。子どもたちは、劇中で職人となって行為し、歌い、笑い、喜び、怒り、苦悩する。そのことで日本酒造りの工程やこれに携わる職人の仕事やその醍醐味と苦労、工夫や努力、団結や連携することの大切さなどを深く実感することができる。そして、その人物の核心や行為の本質に迫ることもできる。それはまさに、道徳の学習指導要領で示されている「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと」[43]を、子どもたちが体得することに他ならない。日本酒造りというわが国の伝統と文化に対する親しみや愛着、誇りをもたせ、郷土のすばらしさを実感させるとともに、これを継承し発展させていく責務についても自覚させることができる。また、職人たちの苦労や喜びを、子どもたちが歌い演じて実感することは、「働くことや地域社会に貢献することの喜びや充実感を味わう」[44]ことにもつながる。このような道徳性の育成は、道徳の「特別教科」化に伴い推進されている「考える道徳」や「議論する道徳」[45]すなわち机上の学習のなかで行うことは難しい。オペラというかたちで頭、心、身体のすべてを用いて全身で追体験することによって、子どもたちは実感を伴って、日本酒造りというわが国ならではの伝統と文化の奥深さを体得することができるのである。またそれらは、1回限り45分程度の「道徳の時間」あるいは細切れの「道徳の時間」で一朝一夕に形成されるものではなく、長い時間をかけて、徐々にそして着実に子どものうちに育まれるものである。

四つ目は、皆で協力して演劇を創り上げることで、子ど

もの人格形成、人間形成に不可欠な思いやりや助け合い、支え合い、協力、友愛といった道徳性が育まれることである。ここでさらに重要なことは、演劇を皆で創り上げ、上演することが、子どもの道徳的感情を強く喚起することである。それは以下、児童が上演後に記した感想に見てとることができる。

~初舞台で得た学び～

まず、大切なオープニングの映像の仕事だ。次は、鍵盤ハーモニカの演奏。いつでも誰かが見ているということを意識して演奏した。最後は踊り。自分に残っている全ての力を出し切って踊った。幕が下りたとき、私たちの胸には、言葉では表すことのできない感動が広がっていた。観客席からの拍手は、練習のつらさや喜び、仲間とともに助け合い、協力し合った日々を思い出させてくれた。初舞台を終えて、36代目という伝統の重みを感じるとともに、ふるさと西条の素晴らしさを改めて実感し、誇りに思っている。また、自分たちにしかできない 「白壁」を創り上げるために挑戦し続けてきたことは、私たち自身の誇りだ。これからも今の自分に満足せず、より高いものを目指して頑張っていきたい[46]。

この児童の感想からは、「白壁の街」への取り組みが、子どもの心を深く揺り動かし、困難を乗り越えてやり遂げることの大切さ、仲間と助け合い、協力し合うことの大切さやすばらしさ、そして、ふるさと西条の素晴らしさを誇りに思う気持ちを強く沸き立たせたことがみてとれる。すなわち、道徳的感情の喚起である。

演劇の創作と上演では、このような道徳的感情の喚起がとりわけ重視される。というのも、道徳性の育成への過程で重要なのが、道徳的感情の喚起だからである。道徳的感情が喚起され、強く深くなればなるほど、それを体験する個人の内で、思考活動や「道徳的実践意欲と態度」[47]が促されるからである。すでに述べたように「白壁の街」では、通し稽古終了後、子どもたちが各パートごとに集まり、自分たちの表現により磨きをかけるため、パートリーダーを中心に反省や課題、改善点を一人一人が出し合い、話し合い議論する姿があった。これはまさに、道徳的感情の喚起によって促された「思考活動」である。また、上述の児童の感想には、道徳的感情の喚起が子どものうちに、より高みを目指して挑戦する意欲や意志の力、すなわち「道徳的実践意欲と態度」をも出現させたことがみてとれる。道徳的感情の深い喚起なしでは、道徳を深く考える思考や意欲は十分に生まれず活動しない。思えば、コールバーグは「道徳的判断に関連する情動や感情の発達は、道徳的発達の重要な側面である」[48]といって感情を重視した。コールバーグが指摘するように、道徳性の育成への過程で重要なのは、道徳的感情の喚起である。それによって、道徳的思考および実践意欲と態度の出現が促されるからである。

以上、東広島市立西条小学校におけるオペラ「白壁の街」の創作と上演の活動を取りあげ、総合的な学習の時間の一環として行われるこの取り組みがいかなるものか、そして道徳性の育成にいかにして寄与するのかを明らかにした。子どもたち全員が皆で演劇を創り上げ、上演することが子どもたちの道徳性を育むことの妥当性および理論的根拠は、演劇を創り上げ、上演することそのものが道徳教育である、との見方を主張した小原國芳の『学校劇論』にみてとることができる。以下、小原による、演劇と道徳教育に対する見方、すなわち、演劇の道徳性の育成への寄与について、小原の主著『学校劇論』に基づき、明らかにしたい。

３．「演劇」が子どもの道徳性の育成に大きな役割を果たす－小原國芳の『学校劇論』－

玉川学園の創設者であり、新教育の理念を発展させ、「全人教育」を提唱した小原國芳は、全人教育の観点から芸術教育ならびに演劇教育の必要性を述べた。小原によれば、全人教育とは、ペスタロッチ－による3Hの教育すなわちHead（頭）、Heart（心）、Hand（手（身体））の三つが調和した教育であり、真善美聖の諸方面にわたって調和し統一ある人格を養うことである[49]。小原はさらに、『学校劇論』において、演劇教育と道徳教育の関係についても明確に述べた。かれは自ら、広島高等師範学校付属小学校や成城小学校で「天の岩戸」「桃太郎」などの学校劇の創作と発表を行い、そのなかで、子どもたちが時間をかけて創りあげ、舞台に立って演じる「学校劇」が、子どもの「情操陶冶」すなわち「自制、進取、協力、勇気、公正、正直」などの徳性の涵養に大きな力を発揮することをみてとったのである[50]。

小原は『学校劇論』のなかで、「学校の道徳教育たるや卒業後三ヵ月も効力はないというも極言ではない。その力や微々たるものである。私は道徳的に日本人を救済するのは実に芸術教育でなければならぬと信ずる」[51]と述べ、「生命に触れぬ言説」[52]すなわち机上の概念や観念の教授を中心とした道徳教育のあり方を批判した。彼は「道徳訓育には芸術の力が大きい」[53]と述べ、美と徳、すなわち芸術教育と道徳教育を一致させる調和的教育を提唱したシラーの「美的教育論」に教育の理想を見出した。小原は、道徳教育に芸術教育を取り入れることを推奨し、芸術教育のなかでも「芸術の頂点は劇である」[54]「劇そのものは実にすべての芸術を打って一丸としたものである」[55]と述べ、とりわけ演劇を重視した。それはまた、演劇が、彼がめざした「全人教育」にかなうものであるからでもあった。彼は、演劇が全人教育であることを次のように述べる。

ただジッと聴いたり、観たり、話したり、読んだりだけ

よりも、自ら舞台に立ち、その一員として演じ行為することがいかに、実感が強く、全身的な、内部的なものが表現され、かつ自分にも感受されるか、いうまでもない。（中略）ただ歌い、ただ読み、ただ話す時よりも、或る大きな一戯曲の一役を務め、自らがオフェリアに、オセロに、桃太郎に、舌切雀に、花咲爺になった時に、真に歌い、真に読み、真に笑い、真に怒り、真に喜び、真に想像することが出来ると思う。すなわち、真の芸術的表現の発露を見ることが出来ると思う。（中略）この芸術的収穫は貴いことで、内容的な道徳的な収穫よりも遥かに高い価値を有するものと思う[56]。

小原によるこの叙述からは、次の二つのことを見てとることができる。一つ目は、演じることが「全身的」すなわち頭、心、身体のすべてを用いて行う活動であり、そのことが子どもの全面的、調和的な成長や発達を促す、すなわち全人教育を可能にするとの見方である。二つ目は、演じることによって、子どものうちで実感を伴って「内部的なもの」すなわち道徳性が醸成されるとの見方である。小原のいう演劇による全人教育とは、このような二つの見方を含有している。言うまでもなく小原のいう「演じる」とは、練習を積み重ね長い時間をかけて取り組むものであるが、かれの見解には、さらに注目すべき見方が存在する。それは、演じることが道徳的感情を喚起する、との見方である。このことは次のような小原の言葉に見てとれる。

村上義光も、ウィリアム・テル父子も、小楠公とその母も、劇化することによりて、どれくらい、子供に強く印象づけ、かつ、真にピッタリ、人物の心を理解せしむることよ[57]。

村上義光は、親王の身代わりとなって自害し、壮絶な最期を遂げ、その義勇の精神が語り継がれている武将である。また、ウィリアム・テル父子は、弓の名手テルが、悪代官による権力に屈せず、息子の頭上のリンゴを見事に弓矢で射落とすという自らの息子の命をかけた闘いを制し、圧政に苦しめられていた民衆を救い、自由を勝ち取る物語である。「小楠公とその母」では、『太平記』に示されるように、南北朝時代の武将、小楠公（楠正行）が自身の自害を思いとどまらせた母の諭しを終生忘れることなく心に抱き、活躍したことが描かれている。村上義光および小楠公とその母では、忠実であることや親孝行の大切さが説かれ、ウィリアム・テルの物語では、正義や真理を追究することの素晴らしさが説かれている。そして小原によればこのような心情は、その人物になって振る舞ったり行動すること、すなわち演じることで喚起されるのである。道徳的感情の喚起である。このことを小原は次のような言葉でも述べる。「人物の行為の価値を了解することは、単に第二者、第三者として或る人物を眺めるときよりも、自らその人物になり了せるときに、特に痛切（に感じられる、筆者注）であることはいうまでもない」[58]。

ところで、演劇は総合芸術であるがゆえに、演劇を創りあげる上では役割分担や協力し合うこと、責任をもつことなどが不可欠であるが、小原は、この協同作業のなかにも道徳性育成の鍵を見てとった。小原は子どもたちが互いに助け合い、協力して劇を創りあげることを「全くすばらしい協同作業」[59]と述べる。子どもたちは、劇の上演の際は、舞台上では息やタイミングを合わせ、何度も繰り返し練習をする。舞台裏では大道具や小道具係、衣装係が、苦労しながらこつこつと舞台装置や背景、衣装などを製作している[60]。このような協同作業が子どもたちの人間形成に不可欠な思いやりや助け合い、支え合い、協力、友愛といった道徳性を育むが、小原によれば、それらはきわめて「尊い」ものである[61]。かれは、このような道徳性の育成にあたっては、カリキュラムを構築したり、題材を探したりするより、演劇を行うことの方がはるかに大きな成果をもたらすと述べるのである[62]。

以上、小原による、演劇が子どもの道徳性の育成に大きな役割を果たすとの見方を明らかにした。その見方は、以下の四点に集約される。①演劇は、頭、心、身体のすべてを用いて行う活動であり、それは子どもの全面的、調和的な成長や発達を促すこと、すなわち全人教育を可能にする、②子どものうちで実感を伴って、道徳性が醸成される、③演じることで子どもの道徳的感情が喚起される、④皆で協力して演劇を創り上げることで、子どもの人格形成、人間形成に不可欠な思いやりや助け合い、支え合い、協力、友愛といった道徳性が育まれる、である。

おわりに

以上、西条小学校におけるオペラ「白壁の街」を取り上げ、道徳性の育成を念頭に置いて行う「総合的な学習の時間」におけるオペラ「白壁の街」の創作と上演の活動が、子どもの道徳性を育むことを明らかにした。さらに、わが国を代表する教育家・教育研究家である小原國芳の道徳教育と演劇教育に対する見解を明らかにしたが、それは、「白壁の街」による道徳性の育成についての見解と合致するものであった。

本稿では限られた紙面の都合上、西条小学校の実践しか取り上げることができなかったが、西条小学校における実践のみをもってして、「総合的な学習の時間」におけるオペラ（演劇）の創作と上演の活動が、子どもの道徳性の育成に寄与するとはいえないのではないか、との指摘もあるかもしれない。このような指摘を念頭に置き、日本全国の小・中学校に目を向けると、わずかではあるが、他にもこのような教育実践が存在する。たとえば兵庫県赤穂市立城

西小学校における地域の特色を生かした6年生全員参加の学年劇「子ども義士物語」はそのうちの一つであるが、ここでも「総合的な学習の時間」の一環として一年間をかけて行う創作劇の取り組みと上演が、子どもの道徳性を育むことが明らかにされている[63]。また、海外に目を向けると、道徳教育の分野で世界的に名高いシュタイナー学校では、道徳性育成の方法として、クラス全員によるクラス劇の上演が必須である。

道徳性の育成を念頭に置いて行う「総合的な学習の時間」における演劇の創作と上演の活動は、小原が「演出者（＝教師、筆者注）は、絵画も、（中略）服装も、音楽も、踊りも、文学も、詩歌も、脚本も……それらの一切を理解せねばならない」[64]と述べるように、教師は、幅広い教養・見識や高い指導力を備えていなくてはならない。このような見識や指導力を持った教師の育成はきわめて重要であり、諸外国の大学の教員養成課程には、演劇教育学科があり、演劇を指導できる教員の養成が盛んに行われている。一方、わが国では演劇の創作と上演を指導できる教師の養成はほとんど行われておらず、演劇教育学科を有する国立大学すら存在しない。このような教員養成の課題については稿を改めて論じたい。

註

1）文部科学省検定教科書:『道徳5』.光村図書, 平成30年.

2）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 85, 平成29年.

3）早川裕隆編著：体験的な学習「役割演技」でつくる道徳授業. 明治図書, 11, 2017.

4）文部科学省：中学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 85, 平成29年.

5）文部科学省「道徳の質的転換によるいじめの防止に向けて②」平成28年. https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/11/__icsFiles/afieldfile/2016/11/18/1279623_1_1.pdf

6）文部科学省「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」資料1, https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/20201204-mxt_syoto02-000011235_2-1.pdf

7）日本演劇教育連盟編：演劇と教育. 晩成書房, 14, 2018年7月＋8月合併号.

8）早川裕隆：大会報告　課題研究Ⅳ　役割演技―ロール・プレイングの理論と実際. 道徳と教育, 第62巻, 206, 2018.

9）文部省：小学校学習指導要領　第3章　道徳, 特別教育活動および学校行事等. 昭和33年改訂.

10）佐々木勇：小学校における総合的な学習の時間の効果的な実践例. 美作大学・美作短期大学紀要vol.65, 103-109, 2020. 音楽教育の観点からも、児童を対象とした質問紙調査等によって、この取り組みの意義が明らかにされている。山村朋子：小学校における郷土音楽の学習に関する研究―オペラ「白壁の町」に着目して―. 広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要, 151-160, 2008.

11）日本教育新聞：6年児童が40年続くオペラ上演, 2021年2月8日付.

12）西条小学校校長、教頭および「白壁の街」の創作・上演指導を担う教師たちへのインタビューより（2021年7月16日、西条小学校）。

13）小原國芳：学校劇論. イデア書院, 1923.（再版）小原國芳：学校劇論. 玉川学園出版部. 1950. 小原國芳：学校劇論（『小原國芳選集5』所収版）. 玉川大学出版部, 1980. なお本稿では、『小原國芳選集5』所収版を中心に用いることとし、以下、『小原國芳選集５ 学校劇論』と記す。

14）冨田博之：演劇教育. 国土社, 1993. 冨田博之：日本演劇教育史. 国土社, 1998　など。

15）法月敏彦：小原國芳「学校劇」のはじまり. 玉川大学芸術学部研究紀要 (8), 1-12, 2017.

16）小原國芳：道徳教授革新論（『小原國芳選集5』所収版）. 玉川大学出版部, 118, 1980.

17）法月敏彦：小原國芳「学校劇」の100年：その目的と変遷. 玉川大学教育学部全人教育研究センター年報, 2016. 法月敏彦：小原國芳「学校劇」のはじまり. 玉川大学芸術学部研究紀要 (8), 2017. 佐々木正昭：学校劇についての考察. 教育学論究, 関西学院大学, 2012. 上田真弓・上間陽子：学校の演劇 ―「学校劇」と日本の演劇史―. 琉球大学教育学部紀要, 2013　など.

18）升田真依子：広島高等師範学校附属小学校における唱歌劇観と成城小学校における学校劇観との比較研究―唱歌劇と学校劇の創始期に着目して ―. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第68号, 307-316, 2019.

19）西条小学校におけるオペラ「白壁の街」を総合的な学習の観点から明らかにした先行研究として、佐々木勇「小学校における総合的な学習の時間の効果的な実践例」（『美作大学・美作短期大学紀要』2020年）を挙げることができる。ここでは、総合的な学習の時間を教育課程の中心に置く実践例として、西条小学校のオペラ「白壁の街」が取り上げられているが、道徳性の育成の観点から論じられたものではない。

20）オペラ「白壁の街」は、開始当初（昭和56年）、音楽部をはじめとするクラブ活動の発表会である「クラブ活動統合発表会」として始まった。当時の教職員は、オペラ「白壁の街」の創作に情熱を燃やし、音楽や脚本、美術や照明まですべて手づくりの舞台を創り上げたという。主要スタッフ（西条小学校の教職員が分担）として、音楽監督を筆頭に、作曲、指揮、演出、照明、衣装、着

付け制作、舞台監督、盆踊り振り付け、大道具、映像・テロップなどが配置されており、本格的な上演体制、指導体制を取っていたことがわかる。5部会60名前後の児童が出演したが、内容的には「科学的要素あり、歴史的要素あり、音楽的要素あり、体育的要素ありと盛りだくさん」であった。演じる子どもたちは踊ったり照明に回ったりと、一人3役までこなした児童も多かったという。（「 東広島学校通信 ガッツ！」Vol.6（令和元年5月27日発行）、「東広島学校通信 ガッツ！」Vol.9（令和2年6月1日発行））。

21）佐々木勇：小学校における総合的な学習の時間の効果的な実践例. 美作大学・美作短期大学紀要, 103-109, 2020.

22）昭和49年4月～昭和59年3月、東広島市立西条小学校に音楽専科の教諭として勤務。昭和56年よりオペラ「白壁の街」の創作に携わる。音楽監督をつとめ多くの曲を作曲し、「白壁の街」創作の主軸を担った。その後、東広島市の小学校教諭を経て呉市立郷原小学校校長をつとめる。郷原小学校を退職後は、毎年、西条小学校に出向き、子どもたちにオペラ「白壁の街」ができた当時のエピソードや、これまで引き継がれて来た思いを語るとともに、合奏や合唱の指導を行っている。

23）昭和50年4月～昭和59年3月まで、東広島市立西条小学校の教諭をつとめる。昭和56年よりオペラ「白壁の街」の創作に携わる。台本や大道具を担当し、松原とともに、「白壁の街」創作の主軸を担った。第36回広島文化賞受賞（平成27年度）。

24）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 58, 平成29年.

25）筆者は、たびたび西条小学校に足を運び、この日は、全体通し稽古の様子を体育館で見学した。（2021年7月16日、西条小学校）

26）第41代オペラ「白壁の街」は、2021年10月11日、東広島芸術文化ホールくららにて上演された。上演当日、配布されたパンフレットにおける中嶋崇弘校長のあいさつ文「未来へと光り輝く 第41代オペラ『白壁の街』」より。

27）文部科学省：小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」. 8, 平成29年.

28）中嶋崇弘校長のあいさつ文「未来へと光り輝く 第41代オペラ『白壁の街』」より。

29）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 35, 平成29年.

30）同上, 71.

31）同上, 36.

32）同上, 70.

33）東広島市立西条小学校　第41代 オペラ「白壁の街」（2021年10月11日、東広島芸術文化ホールくらら）YouTube：https://www.youtube.com/watch?v=M0qbYJc1x6o

34）文部科学省：道徳科と総合的な学習の時間. 小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」. 45-46,平成29年.

35）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 14, 平成29年.

36）文部科学省：道徳教育と総合的な学習の時間. 小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」. 45, 平成29年.

37）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 100, 平成29年.

38）西条小学校第6学年、学年だより「ヒカレ」（令和3年7月、西条小学校）https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/material/files/group/96/R36nen07.pdf

39）同上.

40）同上.

41）総合的な学習の時間の一環として6年生全員を対象に、石川達也氏による講演会が行われた。（2021年10月1日（金）13時半～15時、西条小学校体育館）。筆者も同席し、石川氏にインタビューなどを行った。

42）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 101. 平成29年.

43）同上, 60.

44）同上, 54－55.

45）同上, 2.

46）西条小学校6年生児童によるオペラ「白壁の街」を振り返っての感想（2016年）。https://www.kobun.co.jp/Portals/0/resource/dataroom/magazine/dl/tnavi_plus08_07.pdf

47）文部科学省：小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」. 20, 平成29年.

48）コールバーグ, L／レバイン, C／ヒューアー, A, 片瀬一男／高橋征仁訳：道徳性の発達段階. 新曜社, 124, 1992.

49）小原國芳：小原國芳選集５ 学校劇論. 玉川大学出版部, 240, 1980.

50）同上, 243, 277, 281, 1980.

51）同上, 256.

52）同上, 180.

53）同上, 364.

54）鯵坂國芳：学校劇について. 学校教育 第67号, 広島高等師範学校教育研究会編輯, 47-49, 1919.

55）同上.

56）小原國芳：小原國芳選集５ 学校劇論. 玉川大学出版部, 283-284, 1980.

57）同上, 289.

58）同上, 290.

59）同上, 367.

60）同上, 参照.
61）同上.
62）同上, 参照.
63）押谷由夫編著：自ら学ぶ道徳教育. 保育出版社, 135-140, 2016.
64）小原國芳：小原國芳選集５ 学校劇論. 玉川大学出版部, 326, 1980.

Upbringing of the Morality in "Period for Integrated Study" —Mainly on the Opera "Town of the White Wall" by Saijo Elementary School in Higashi-hiroshima City and "the School Dramatic Theory" by Kuniyoshi Obara.

Ayako HIROSE

Faculty of Human Sciences, Niimi University, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This report questions "acting" and "the role playing" that are one of the educational methods of the moral education and clarifies about the opera in "period of integrated study" to take upbringing of the morality into consideration. Also this report clarifies the theory of drama education and the moral education by Kuniyoshi Obara to present the validity and rationale of the opera. Opera "the town of the white wall" in Higashi-hiroshima City Saijo Elementary School performed as part of period for integrated study enables upbringing of the multifaceted moral value. In addition, upbringing of the morality by the deep cooperation with home and the community is enabled. In this report, it was clarified about the theory of drama education and the moral education by Obara. That is to say, ① drama is an activity to perform using head, heart, all physical, and it enables promoting growth and the full-scale development of the child, namely all-round education. ②Morality is bred with an actual feeling among children. ③The moral feelings of the child are roused by acting.

Keywords: Period for integrated study, upbringing of the morality, Opera "the town of the white wall", Kuniyoshi Obara